

秋成文学の思想

鷺山樹心 著

法
藏
館

著 者 紹 介

1920.11.23 熊本県に生まれる。
1948.10 大谷大学文学部国文学科卒業
1961.3 同大学院博士課程修了
現 在 花園大学教授

主な論文 〈中古関係〉

「伊勢物語は古今集に先行する」(『文学・語学』第10号)・
「伊勢物語『狩の使』の段について—史実説存疑—」(『文学』VOL.39)・「更級日記における宗教的自覚過程」(『仏教文学研究』第7集)・その他

〈秋成関係〉

「秋成文学に現われた発心の事情」(『仏教文学研究』第Ⅱ期 第1集)・「上田秋成と近世仏教」(『仏教史学研究』19巻1号)・「上田秋成晩年の儒・仏二教観」(『花園大学研究紀要』第6号)・「浅茅が宿」の構想—流離七年について—(『文芸論壇』第10号)・その他

編 著 「仏教説話—研究と資料—」(法蔵館刊)

昭和54年 1月 20日 第一刷 ©

著 者 わし やま じゅ しん
驚 山 樹 心

発 行 者 西 村 七 兵 衛

発 行 所 株式会社 法 蔵 館

600京都市下京区正面烏丸東
電話 075 (343) 0458
振替 京都 2743

清水・吉田

はしがき

上田秋成の文学の基調となる思想性に視座を定めて、その本質を明らかにするのが本書の目的である。周知のように、秋成は『雨月物語』や『春雨物語』の作者として近世文学史上に顕著な足跡を印している。が、秋成は作家であると同時にすぐれた国文学者であり、思想家であり、歌人でもあった。また、俳人・茶人としての一面も見のしがたいものがある。これらの資質が渾然一体となって、その生涯の文学の思想形成に深くかかわっていることはいうまでもない。秋成の文学と思想のかかわりは深く、彼の文学にとってこの思想性の究明は重要な研究課題となる。

従来、秋成文学の思想は真淵以来の国学思想であり、それは『雨月物語』より『春雨物語』へと次第に深まりをみせているとはよくいわれることである。が、秋成の文学を真に内面から支える思想には、国学思想という一面観だけでは把らえきれないものがあるように思われる。たとえば、秋成がその晩年、国学信念の高揚から日本固有の質朴の気風を慕い、外来の儒・仏二教に対する批判の態度を鋭く表明した作品といわれる『春雨物語』に限ってみても、その最終話「樊噲」の一篇の結末などは明らかに仏教の本質を肯定する立場から描かれている。同様のことは「宮木が塚」「死首のゑがは」その他の作品についてもいえる。ちなみに、秋成は晩年の歌集のなかに、「声清くとなふる御名のたのまれて身は罪なしと思ひ社なれ」(藤裏冊子)「石にきるあさなゆふなの油火のあかきを頼む後の世の為」(鶯居帖)「みほとけの教へをきけば春待つもつくれるつみのかずさにざりける」(毎月集)などの詠み歌があるのが目にとまる。『春雨物語』にみられる仏教肯定の態度は、単に作品構成上の必要に基づくものではなく、これら

の和歌にみられるような自照的な彼の宗教的心情と決して無関係ではないように思われる。このような見地から、秋成生涯の文学の基調となる思想については、国学の思想とは別の角度からの詳細な見なおしが必要となると私は思うのである。

本書は、第一章を「上田秋成の境界」と題し、秋成の精神遍歴面に視点を定めて、その作家的生涯を概観し、秋成文学の思想形成の過程の照射をこころみて序論とした。第二章「秋成文学の思想」は、いわゆる本論である。ここでは、先ず当面の課題となる真淵以来の国学と秋成のかかわりをいかにみるべきかについて検討し、一方、秋成の儒・仏二教観の本質とその位相を明らかにすることに努めた。この間、秋成の儒・仏二教に対する見解は、理論的には真淵国学よりはむしろ、大坂が生んだ秋成とは同時代の不世出の思想家富永仲基の学説に近接した方向性を持つことを明らかにし、ついでこの点を秋成の文学作品に投影した儒・仏二教観に照らしあわせて確かめ、特にこの儒・仏二教観を基調とする『春雨物語』の思想と、秋成晩年の精神境界との相関関係に言及した。第三章は各論であり、初期の浮世草子・中期の『雨月物語』・晩年の『春雨物語』に収められた個々の作品について、特徴的な儒・仏二教観に関する考察をおこなったものである。

秋成文学の研究に際しては、その作品の個個を内面から支えて一貫する思想性の正しい把握が重要な条件となると考える。それだけに考証上恣意的な解釈に陥ることのないように自戒しつつ論述することに努めたが、多少の誤りを犯しているかも知れない。おおかたのご批判とご叱正をたまわるならば幸せである。

昭和五十三年九月

鷺山樹心

目次

第一章 序論	——上田秋成の境界——	七
--------	-------------	---

I 秋成の才藻	八
II 出自に触れて	二二
III 浮世草子と秋成	二〇
IV 『雨月物語』への志向	二五
V 離郷のあとさき	三三
VI 秋成晩年——『春雨物語』の境界——	三六

第二章 総論	——秋成文学の思想——	三三
--------	-------------	----

第一節 秋成と国学	三六
I 秋成と字万伎	六六
II 真淵国学と秋成	七九
III 宣長の復古思想と秋成の立場	八九

第二節 秋成の儒・仏二教観……………一〇三

一 論説・随想……………一〇三

Ⅰ 本質論……………一〇四

Ⅱ イ 儒教批判 ロ 仏教批判

Ⅲ 現状批判……………一〇七

Ⅳ 史観——二教思想の歴史的把握態度——……………一一三

Ⅴ 儒・仏二教観の位相——富永仲基説との関連——……………一二九

二 文学作品……………一四〇

Ⅰ 初期の作品……………一四〇

Ⅱ 中期の作品……………一五〇

Ⅲ 後期の作品……………一五七

第三節 秋成晩年の境界と文学の思想……………一六〇

第三章 各論……………二〇五

第一節 初期浮世草子と仏教……………二〇六

第二節 『雨月物語』と仏教……………二〇六

Ⅰ 「青頭巾」と禅思想……………二〇六

第三節 『春雨物語』と儒・仏二教観

Ⅱ 「浅茅が宿」の構成	二六〇
Ⅲ 「夢応の鯉魚」考	二六三
Ⅰ 「二世の縁」の仏教観	二六八
Ⅱ 「血かたびら」の思想	二七三
Ⅲ 「天津処女」と僧正遍昭	二七八
Ⅳ 「宮木が塚」の素材と構想	二八六
Ⅴ 「死首のゑがほ」と仏教	二九〇
Ⅵ 「樊噲」の主題	二九三

付 論	二九七
-----	-----

Ⅰ 『山霧の記』における石霜禪師逸話についての覚え書	三九八
Ⅱ 秋成とその妻	四〇八
Ⅲ 秋成と唯心尼	四一五
Ⅳ 桃隠禪師覚え書	四二〇
あとがき	四二六

第一章
序論

上田秋成の境界

I 秋成の才藻

作家上田秋成の名声を近世文学史上不朽のものとしたのは、傑出した初期読本『雨月物語』の存在によってであったが、戦後間もなく彼の晩年の創作『春雨物語』がほぼ完全に近い形で世に出て以来、その作家としての地位は更に不動の重みを加えて定着するに至ったといえる。作家としての秋成の創作活動は、右の二篇の読本を軸に初期の浮世草子『諸道聴耳世間猿』『世間妾形氣』、『雨月』と『春雨』両物語の中間に書いた『書初氣嫌海』『癩癩談』、なお一書としては纏まらぬままに他の著作類の中に書き留めた若干の小品群を含めて考えられるが、とりわけ『雨月物語』『春雨物語』の二作品は、他の諸作に比べて出色のでき映えとなったわけである。

ところで、上田秋成の全生涯の行実を見ると、彼の学問・文芸その他に渉る業績は、以下に概観するように広範かつ多彩であり、作家秋成の名は、実は彼の一面に冠せられた評価に止まるようにさえ思われるものがある。秋成文学の思想について論究を試みる場合、先ずこの間の事情を十分に踏まえておかねばならぬことはいうまでもない。

秋成は青年の頃、文芸に遊ぶ手始めに俳諧に意を注ぎ、その後もこの世界に強い関心を示している。二十二歳の宝暦五年、越えて同七・八・十年に粹行を見た上方俳壇の句集『うたたね』『俳諧十六日』『皆面美』『おひきのめ』

『はなしあいて』『裸嘶』『雪達磨』などに、秋成は「漁鳶」の俳号を用いて入句しているが、彼の俳諧への傾斜は単に句作の範囲に止まらず、四十一歳の安永三年には俳論『也哉抄』を著わし、高名な俳人蕪村はこれに長文の序を与えて、そのなかに「我友無腸居士……もとより俳諧をたしみて梅翁を慕ふといへども、芭蕉をなみせず」云々と讃えている。同じく安永五年、かつて彼が俳諧の師とした几圭の十七年忌の手向草『続明烏』に「無腸」の号を用いて七句を収め、かつ、この巻に先師几圭追慕の跋文を乞われるほどの力量を示すに至っている。秋成は几圭在世中にその子几童を知ったが、几童はその友東皐に宛てた書簡の中に秋成を紹介して、「摂陽に無腸といへる一大家あり。詩をよくし、万葉をよみ、俳諧は宗因・鬼貫・来山をとる。無双の才子也」と讃え、また蕪村はその書簡の中にしばしば秋成のことに触れ、その都度に「蚊しまの法師」「蚊しま坊」「蟹先生」「かしまのおやじ」「無腸士」「かしま居士」など、親愛の情を込めて呼びなしている。⁽²⁾ けだし、蕪村が秋成を呼ぶのに多く「蚊しま」を冠したのは、安永二年より三、四年にかけて彼が摂津加島村にもの学びのために移り住んでいたことによる。「蚊しまの法師」「蚊しま坊」あるいは「かしま居士」などと呼んだのは、当時の秋成の生活態度がすでに脱俗性をただよわせていた所為でもあろうか。「加島」の「加」を「蚊」に作り、「法師」「坊」「居士」「おやじ」などと呼びなすところに秋成に対する蕪村の深い親愛の情を感じとることができる。⁽³⁾ ともあれ、几童の秋成認識といい、蕪村のそれといい、これらは当時上方俳壇における秋成の俳人としての知名度がかなりの高さにあったことを示す証左と見做し得るように思われる。天明三年十二月二十五日、蕪村が京洛に没した時、秋成はその計報に接して一文を寄せ、文中蕪村を「実に当世の作者」と讃え、追悼の一句「かな書の詩人西せり東風吹いて」を添えて彼の作風を適確に評している。このようなところに、作家とは別の俳人・俳文学者としての秋成の捨象し難い一面の顔が認められるのである。秋成はまた、近世の歌人・歌学者としても一家を成した人である。その歌風は藤原宇万伎を介して学んだ真淵の

万葉振に少なからぬ影響を受けたが、後年親交を結んだ京都歌壇に著名な小沢芦庵にも人間的な影響を受け、その晩年には独特の陰翳に富む歌風を形成している。生涯に作る歌は一部長歌の類をも含めて二千数百首に及び、これらは『藤箋冊子』『秋の雲』『鶉居倭哥集』『桜花七十章』『毎月集』などの歌集に収め、また独自の歌論を『万葉集会説』『金砂』『橘の杣』『冠辞考統紹』などの歌学に関する著作類に書き残している。秋成は晩年京都に住みながら、中世以降伝統的勢力を持っていた堂上家の歌風・歌論に与せず、特定の既成歌壇にも帰属しなかった。またこの道での弟子を取ることもなく、独り歌の道を楽しんだゆえもあって、歌人としての彼は一般には閑却に付されがちであった。しかしながら、最近浅野三平氏は『秋成全歌集とその研究』⁽⁵⁾を公にされ、その精緻な調査結果に資せられて、秋成生涯の和歌並びに歌論の業績をあとづけてみると、作家秋成の名に隠れてとかく近代まで注目されなかった歌人・歌学者としての彼の歴とした顔がそこにあることを看過し難いのである。

上田秋成を知るうえで更に注意すべきは、その広範かつ多様に渉る学問上の造詣の深さである。秋成は壮年の一時期藤原宇万伎に師事してその学問方法（古学）に深い示唆を受けた。宇万伎亡き後は専ら独学をもって記紀・万葉に現われた上代の思想研究に意を注ぎ、生涯の間に『神代がたり』『安々言』^{やすうこと}『遠馳延五登』^{とせえご}などの史論を著わすに至っている。特に『遠馳延五登』には独自の史観に基づく儒・仏二教受容の歴史に関する批判的見解が披瀝されており、この著は晩年の随筆『胆大小心録』とともに、秋成文学の思想の基点を探るうえの重要な手がかりを含んでいる。また、秋成は師宇万伎に示唆された古学研究の立場から、『土佐日記』をはじめ『伊勢物語』『大和物語』『落窪物語』『かげろふ日記』そして『源氏物語』などの主たる中古文学作品の本文注釈研究に努め、『源氏ぬばたまの巻』『よしやあしや』などの著作にこの方面の業績を少なからず残している。学者としての秋成の眼識はまた如上の領域に止まらず、上代音韻学の分野にも及んで『霊語通』を著わし、高名な国学者本居宣長の音韻学说に対

して、特に上代における「ん」音の有無をめぐる論争を果敢に展開したことは国語学史上有名である。なお宣長との学問の論争は音韻についてのみならず、『古事記』を典故とする日神論・国体観にも及び、その内容を宣長側から記録した『呵刈腹』の一書は、今日学者・思想家としての秋成の真価を問う好個の資料として特記すべき事柄を含んでいる。

秋成は三十八歳の頃火災によって養父上田茂助より相続した家産のすべてを失ない、その後生活の必要上俄に医学を修め、爾来およそ十五年に涉って町医を営んでいる。彼ははじめ大坂天満の儒医都賀庭鐘の私塾に学んだが、ここで漢籍読解の力を養い、医書に触れる一方、同じ大坂の物産学者木村兼葭堂にも親交を結んで本草学にも興味を持ち、薬種についてもかなりの知識を吸収したものと思われる。かくておよそ二年間に及ぶ医学修行の後、安永四年、四十二歳の時、大坂尼ヶ崎一丁目において開業に踏み切っている。彼の医学上の知識がいかほどのものであったかは残念ながら詳しく知る手がかりはないが、何ごとにつけても一途なその人となりをも勘案するとき、この医学上の知識もまた決して雑駁杜撰なものではなかったと思量される。秋成の見識のなかに実証を重んじる一面の性格が伺われるのは、師の宇万伎の考証学的学問態度（後述）の示唆によるところが多かったが、他面には、特に実地を重んじる医業の素養に与かるところもあったのではないかと想像される。

かように、広範な学問・文芸の蘊蓄に支えられつつ、かつ作家としての道を歩んだ秋成は、また趣味人として、特に茶に深い造詣を示したことも特筆にあたいする。彼は利休以来当世流行のいわゆる点茶の格式・流儀には目を向けなかった。生来酒を好まぬ彼は、日頃は専ら煎茶をたしなむかたわら、自ら土を捏ね、窯に火をいれて、雅味豊かな、しかも実用的な急須や茶碗・風爐などを焼き、また、寛政六年、六十一歳の時には、中国や日本の茶に関する古文獻を資料として煎茶に関する著『清風瑣言』上・下一巻を上梓している。文化元年、七十一歳のおりの

『茶を翫ぶ人に示す』という扇面一葉の文（現・天理図書館蔵）に、「酒に代て誰いにしへに遊びけんにごれる世にもすみてあらばや、酒に酔へば濁りて泥の如し、茶にあへばすみ、仙に通ずるとや。さらば清まらずにございづれにも酔はであらまほし。我はすみと濁るのあひだにと、むかしもいひし人ありき」とある。秋成独自の茶の道への傾倒は、単なる文人趣味の域を遙かに超え、特に晩年に至つては神韻縹渺の境にあつたことがわかる。

さて、上田秋成は『雨月物語』『春雨物語』をもつてその名を不朽のものとしたが、この作家秋成の文学の思想を内面から支えたものは、既述のごとく広範に及ぶ天賦の素養ともいふべき才藻と思索であつたといえるであろう。ところで、この秋成に関する伝記については、秋成研究の先覚者藤井乙男氏の優れた『上田秋成伝』以来、学者の考証が積み重ねられて⁽⁶⁾いる。私は秋成文学の思想に関する本論を展開するに先立って、諸先学の秋成の伝記に関する研究に資せられつつ、以下特に彼の精神生活面の探究に心がけ、独自の立場からその生涯における人間像の素描を試みておきたいと思う。

Ⅱ 出自に触れて

洛東南禅寺の表参道脇にある西福寺というささやかな浄土宗の寺の庭に、上田秋成の墓がある。碑面には、「上田無腸翁之墓」とある。いまみるこの墓碑は、秋成十三回忌に当たる文政四年（一八二二）に有縁の人びとが建てたもので、その台座の古い石をよくみると、それは心なしか肘を張り缺を構えて身をまもる蟹のすがたに似ている。この石は生前の秋成が伏見の山中でみつめて庵に持ち帰り、履脱に据えて愛玩していたものを、そのまま用いたものであるといわれる。碑面の「無腸」とは、壮年のころから秋成が好んで用いた筆名のひとつである。台座の石の蟹形から推しても、それは「横行介士、無腸公子」にちなんでつけた蟹の異名と解される。秋成は「以其外骨曰介士、

以其内空則曰無腸」の句（『抱朴子』登涉）を思い浮べながら、我と世のかかわりをなにかば自嘲の心情をもって、かく呼びなしたものと思われる。彼は晩年の随筆『胆大小心録』（異本）の中に、

有蟹石翁者、形不醜已、心亦醜也。以橫行為直、雖眼高腹大、性躁而、屹々志変。二螯八跪之剛、不以人恐。口吃常涎沫流、言語不分、以螯為筆、好理論弁説、人不必用其言。於是穴居崖下、為有一天地。春地不順、花卉鳥虫無時。近會発憤言、「人云美我見之醜。美醜不相分、則又無有善惡邪正矣」。甲堅螯振、遂爪折、身為廢物。於是愈逡巡、守独幽耳。（蟹石翁なる者有り。形醜なるのみならず、心も亦醜なり。横行を以て直と為し、眼は高く腹は大なりと雖も、性は躁にして、屹々志変り、二螯八跪の剛、以て人恐れず。口吃りて常に涎沫流れ、言語分かれず、螯を以て筆と為し、理論弁説を好めども、人必ずしも其の言を用ひず。是に於て崖下に穴居し、一天地有りと為す。春地へ順ならず、花卉鳥虫時無し。近會発憤して言ふ、「人美と云ふ我之を見て醜となす。美醜相分れずんば、則ち又善惡邪正有ること無し」と。甲堅く螯振へども、遂に爪折れ、身廢物と為る。是に於て、愈々逡巡し、独幽を守るのみ。）

という一文を改まった漢文で書き留めている。これは「無腸」と号した自己の心中を蟹石翁の言行に擬して語ったものと解される。また彼は山上憶良の「貧窮問答」に想を得て「多福言」と題する「此蟹やいづこの蟹ぞ……」に始まる一連の長歌を書き残しているが、その反歌に、

蘆蔭のあな憂ともしらでおのが世を横走りてぞ在りはてんがに

と詠み、右記の蟹石翁の一文とはほぼ同様の感懷を吐露している。秋成周辺の人びとは彼をいかに評したかは暫く措くとして、これらの記事は、秋成が自らを「無腸」と呼びなして、世にある自己の性向をいかに認識したかを知るひとつの手がかりとなる。

西福寺過去帳の文化六年の丁を見ると、同年多くの物故者のつらに、

大坂出生歌道之達人

三余齋無腸居士

六月

廿七日
七十六歳

という記録がある。「三余齋無腸居士」とはまさしく上田秋成の法名である。これによつて秋成は、文化六年（一八〇九）六月二十七日、京の地で七十六年の生涯を終わつたことがわかる。文化六年を遡る七十六年前の享保十九年（一七三四）、秋成は大坂の地で生まれたことになる。産声をあげた月と日をさだかに知る資料はない。

ところで、秋成の出生は数奇の一語につきる。風説によれば、生母は曾根崎の遊女とも、伎樓の娘とも伝えられる。近時、秋成の父は小堀遠州六代の孫に当たる小堀左門という直参で、母は大和名柄の庄屋末吉庄蔵の娘であつたかと推定する説が出て学界の耳目を惹いたが、その後この説を資料的根拠に乏しいとして否定する説が出るなど、秋成の出生をめぐる問題は依然として謎というほかはない。事実秋成は、自己の出生については生涯なにひとつ具体的な事情を語っていない。ただ、彼が六十七歳のおりに、かねて実懇の間柄にあつた京都八条の大通寺内の実宝院主に宛てた書簡のなかに、「老懶元来不遇薄命、実父生死不知、実母一面耳。養家ニテモ母二人有之、後母ノ意ヲトリカネ、不孝不可述……」（圈点筆者）とある。また、七十五歳の時、知音（方観こと初代高橋道八）の作る自像を収めた箱書に、「無腸、生于浪華、客于京師、十六年、無父不知其故、四歳母亦捨、有倅上田氏所養、歳六養母逝、性多病、時々発驚癇、後母依慈愛成長……嗟呼天為何生我耶」（無腸浪華に生れ、京師に客となりて十六年、父無し其の故を知らず。四歳母亦捨つ。倅有りて上田氏に養はる。歳六養母逝く。性多病、時々驚癇を発す。後母の慈愛に依り成長す、……あゝ、天何の為に我を生みしや）と認めている。が、これらが僅かに彼の出生ならびに生